

患者

要に

「ア研究会」

た」「遺族」。「医師もはつきり分からないのに、余命の告知に何の意味があるのか」(同)

「こうした声に、会場からは「どこまで事実を知りたいのか、事前に医師は患者に聴くべきだ。患者側も知りたいこと、知りたくないことを医師に伝えることが必要だ」という声も。

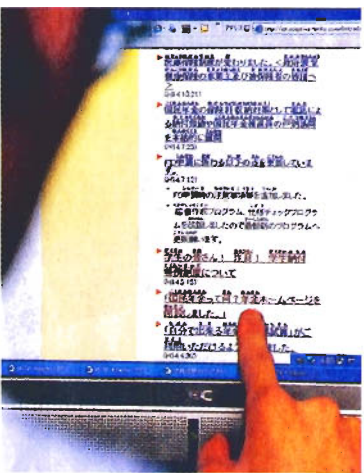
自身もが患者で、パネリストとして参加した前川育さん(ＮＰＯ法人周南いのちを考える会代表)は、信頼できる医師と出会えたことで「告知によって違う自分に生まれ

変わる事ができた。私はがんで不幸せだと思わない」と述べ、医者と患者は人間対人間という関係であるべきだと訴えた。

ある医療関係者は「告知を受けた」患者の反応に答える能力と技術を医師が養うことが必要だが、現状ではそれを大学で学ぶことは難しい。市民からもっと声を上げていくべきだ」と述べた。

サイトに漢字に無料でルビ振り

障害者支援団体



ホームページ画面上の漢字にルビを振って表示される

学習障害で漢字の読めない人や外国人向けに、電子メールやサイト上の漢字に自動的にルビを振るサービスを、IT(情報技術)を活用した障害者支援に取り組み団体「アダプティブテクノロジー」が無料で始めた。

同団体代表で、システムを開発した鳥原信一さんは、情報の提示の仕方を交換させるこの技術を発展して、「その人の障害の種類や程度、属性や好

み、TPO(時、場所、状況)に合わせて情報を提供できるようにした」と夢を語る。

利用者は一度ユーザー登録をすれば、後は「アダプティブテクノロジー」の運用するサーバーを経由してホームページを閲覧したり、メールを受け取ったりするだけ。使われているすべての漢字にルビが振って表示されるが、同じ機能の市販パソコン用ソフトと違っ

て無料で、携帯電話からも利用できるなどの特長がある。

鳥原さん自身、網膜色素変性症という病気の視覚障害者。画面のデータを音声で読み上げるパソコンソフトを日常的に活用し、慶応大学院で研究活動に取り組んでいる。ITの恩恵を受ける一人だが、現在の障害者支援技術には不自由さを感じるといふ。

ソフトでパソコン画面の意味をつかもうとする」と、文章を最初から最後まで聞いていなければならぬ。じれったいが、現状では障害者が、支援技術の仕様に合わせる形で利用せざるを得ない。鳥原さんは「パソコンの側が障害者の個別の状況を察知し、文字や音声、動画、静止画などを組み合わせて、必要な情報をその人の欲しがる形で自動的に提供する」ようなシステムを理想として思い描く。

「漢字が苦手」という

人に合わせてルビを振り、読みやすくするサービスはこの構想の具体化の第一歩だ。今後は平仮名のルビの代わりに、英語や中国語など外国語の単語を表示したり、その単語に関連した画像や音声を付けたりするなど、利用できる人の範囲を拡大していくという。外出先で見掛けた看板などの文字もカメラ付き携帯電話で撮影してメールで送れば、ルビを振って読み方を教えるようなサービスの実現も目指している。

情報ネット

▼食事サービス活動 セミナー 高齢者の「食」の在り方にさまざまな観点からアプローチする全国老人給食協力会(東京都世田谷区)主催の第6回全国食事サービス活動セミナーが20日、東京都千代田区飯田橋のシニアクラブ東京で開催される。

プログラムは、厚生労働省の担当者「食事サービス施策の動向」と題して講演した後、「食事サービスコーディネーターの役割」をテーマに全体会に移り、日大の内

藤佳津雄助教や食事サービスをしているNPO組織の代表らが討議する。午後からは分科会A「教育機関との連携」講師・清水洋行東京学芸大講師)、同B「老化を抑える食事づくり」(講師・柴田博桜美林大教授)に分かれ、事例報告や提案が行われる。

参加費は、会員登録5500円、一般6000円。問い合わせ、03(5426)2547、ファクス03(5426)2548。